

が徐円朗を撃った。丁卯、劉黑闥が定州をせめた。秋七月、世民は徐円朗を撃ち、淮濟の閭をほぼ平定したので、神通らに円朗を攻めてせ、乙酉、凱旋した。

九月、劉黑闥が瀛州を陥れ、刺史馬匡武を殺した。

冬十月己酉、齊王元吉に詔して劉黑闥を山東に討たせた。癸丑、貝州刺史許善諶と黑闥の弟十善が戦い、許軍は全軍戦没した。乙丑、淮陽王道彥が黑闥と下邳で戦い、死に、全軍やぶれ、副將史万室は逃げ帰った。この敗戦で山東は震駭し、旬日のうちに黑闥は故地を回復した。乙亥、涪州に入城した。

十一月庚辰、滄州刺史程大買は城を棄てて逃げ、齊王元吉は劉黑闥の兵が強いのをおそれ、前進しようとし、甲申、太子建成に詔して黑闥を討たせることとし、陝東道大行台、山東道行軍元帥、河南河北諸州のみならずの指揮下に入れ、自由裁量の権限を与えた。己亥、元吉は兵をやり、劉十善を魏州に撃破した。相州以北の州景は魏州を除いてみな劉黑闥に付いた。

十二月、劉黑闥が魏州を攻めたとき、太子建成、齊王元吉の大軍が昌樂に到着した。魏徵が太子に、「前に黑闥を敗ったとき、劉軍の將士の亡命者の名をあげてさがし出し、死刑にし、その妻子を俘虜としました。だから齊王が未られて、劉軍に属したのも許すという詔書を触れても誰も信じないのです。いま囚俘に言い含めて釈放してやったら、劉軍は離散するでしょう。」太子はこれに従った。黑闥軍では食糧が尽き、逃亡者が多くなる。黑闥は、城中の兵が出て、大軍と表裏から自分を撃ちつけめかと恐れ、夜、遁れ、館陶まで来たが、永濟橋が完成して、いな

ので渡れない。壬申、太子・齊王が大軍をひきいてやって来た。黒闥は背水の陣を布き、橋の完
成するのを見ると、すぐ橋西に渡った。劉軍は混乱し、武器を捨てて来降するものが続出した。
太子軍は黒闥を追撃しようとしたが、千余騎が渡ったところで橋がくずれた。それで黒闥は数百
騎をつれて逃げるこゝろができた。

武徳六年（六二三）春正月己卯、劉黒闥の任命した饒州刺史の諸葛徳威が黒闥を執え城を挙げ
て降った。当時、太子は騎將劉弘基に黒闥を追わせていた。黒闥は休息する間もなく、饒陽に乗
たとき従う者は百名あまり。たいへん飢えていた。徳威が出迎え城中に導こうとする。徳威が涙
を流して請うので、黒闥は従った。城傍の市中で休憩すると、徳威が食事を進めた。食事の終ら
ぬうちに徳威がとらえ、太子に送った。弟の十善と共に洛州で斬られた。黒闥は刑に臨んで歎じ
ていった。「おれは家にいたら菜、ばを植えていられたのに、つまらん運中にそそのかされて、こ
のやまだ」

七

太子建成が劉黒闥を斬り、ついで李神通にせめられた徐円朗が数騎をつれて逃走中野人に殺さ
れたことよって、河北・山東が実質的に唐朝のものとなった。

『舊唐書』の編纂は新・旧『唐書』のそれよりおそく、資料にはより恵まれたためであろう。
記述はおおむね精確になっている。しかし編者は太宗ファンとみえ、太宗のアバタはほとんど悉

くエクボとなり、太宗と対立した者のエクボはアバタとなっている。

洛水城が陥って羅士信が殺されたのは、それを雪のせいにしてしているけれども、これは大敗としかいいようがなく、あるいは「秦王、黑鬮ノ兵ノ強キヲ恐レ、坐シテ進マズ」といふべきところである。他の諸將の失敗や敗北には失った兵数が記されるが、太宗の失敗にはその兵数は記されないか、うちわに記される。洛水の陥没では羅士信の部下の数はあるが、もともとそこにいた李去惑とその部下や城中の人民の数は記されていない。

秦王世民と黒鬮の決戦のとき、世民は決瀆放流作戦をとったが、これこそあの後漢の光武帝が人から教えられてもとらなかつた戦術である。『通鑑』は黒鬮の部下の水没数しか記さぬが、世民の部下にも溺死者があつたはずであり、戦いにかかわりない人民にもあつたはずである。洛水の攻防戦では秦王世民は部下を見殺しにし、若気のあやまちとしかいいようのない軽挙盲動から死地に陥、たときには部下に救われているのである。

劉黑鬮討伐のとき、李神通も、世民の弟の元吉も、参加しているのに、この二人のことは、参加していることの外に何一つ記されぬ。かれらの功は世民の功に吸収されてしまつているのである。しかし、早くから竇憲徳と戦い、敗れてその捕虜となりながら客として待遇された神通は、建徳の片腕であつた劉黑鬮とも何がしかの交渉があつたはずである。その神通の経験と知識が世民の成功に全く寄与しなかつたとすれば、それはよほどおかしいことであらう。

それけともかく、唐朝の軍隊と劉黑鬮の軍隊とが攻防したその全経過を通じて霽雪と凌河とがつねに決定的なモメントとなつているのは奇とすべきである。長い退却戦ののちついに勝利をか

ちえた後漢の光武の決定的瞬間が霜雪中の氷上渡河であり、それが劉黑闥討伐戦の最初であり最後である。饒陽においての事であつたことを思いあわせるならば、いよいよ奇ではないか。

光武帝劉秀が勝利を得たのは耿弇や白衣の老人や信都太守任光がかれを支持したからであつた。李神通が敗れたのは身方であるべき李鬱が見捨てたからであつた。羅士信が殺されたのは上司である秦王世民が見捨てたからであつた。世民の勝利はかれが見捨てたあるいは将来見捨てる人たちがかれを支持しつづけたからである。劉黑闥が殺されたのはかれの部下が裏切つたからである。世の史官は、勝利者には、聖徳の光背を裝飾し、失敗者にはしはしは凶悪、愚劣の刻印をおす。だがまことの聖徳が勝利を得、凶悪・愚劣が失敗した例を、その反対の例よりも多く史官はあげることができらうか。

「唐李壽藝癸極商報」の記者は、李壽于武徳二年同魯建徳領導的農民軍作戦時、明明被打得全軍陷没、且当了俘虜；而文却吹嘘為、禁令肅清、に専乎洽、扶老携幼、動色相趨。武徳四年、李壽同劉黑闥作戦時、望風皆破、皆為（劉黑闥）所敗；而志文則說、累致克捷、真是弥天大誑、扱尽歪曲歴史事實之能事、と云う。太宗が自分に都合のよいように描かせた『高祖実録』や『太宗実録』にもとづいて書かれた『旧唐書』を信じてあわたしく喜誌を読めば、このような説が出るのもやむをえぬ。しかし喜誌を冷静に読めば、禁令肅清、云々は武徳元年の宇文化及討伐の際のことで同二年の審憲徳との対戦のことではない。累致克捷は洛水の戦と徐円朗討伐にかかるので、すなわち武徳六年のことであり、武徳四年の饒陽での劉黑闥との対戦にかかるとではない。これは決して歴史事實の歪曲ではない。饒陽の戦で『通鑑』は神通の兵数を五万余と

するが、この数は李璽の軍をけじめの邢・洛・相・魏・恆・靜の兵を合した数で、神通の直接にひきいたのは屢誌によれば兵二千、馬八百であった。邢等の州兵はもと寧憲徳の勢力下にあつて、璽に志じて左右したのだから、神通の指揮下にはい、たからといって、その意志のままには動かなかつたであらう。『通鑑』のいう八士馬軍竄亡失三分之二も、五万の三分の二なのか、二千の三分の二なのかは、きりせぬ。八望風皆破は太宗が神通の反発にムクれてはなつた嘲罵のことばであつて、その現場に太宗がいて見たわけではない。太宗の嘲罵を記録したのは『太宗実録』であろうが、『太宗実録』を編輯したのは神通に「刀筆之人」といわれた房玄齡たちである。

一九七〇年代の史家がなお信じるほどに太宗にとつて有力な史実を、唐朝の人士が信じるのはあるいは信じるふりをするのは当然であらう。その当然の中で、これを疑うものが、その事件のかつてあつた場所に立ち、その疑いをあらわに表現することが出来ぬとき、そこでもなおかつ表現せざるを得ぬ慷慨をいどくとすれば「声無シ」というほかはないのではないか。

霜花草上大如錢 揮刀不入迷濛天 爭滄海水飛凌喧 山瀑無声玉虹懸

李璽の「北中寒」の後半四句は、このような心情から生れたのではないであらうか。

八

「北中寒」が、いつ、どこで作られたかは明らかでない。元和七年の事件に融発されて、といつたのは姚文燮だが、その信じがたいことは前にい、つた。

わたしは、「北中寒」は、元和十一年の秋から、冬にかけてのある時期に、饒陽西南の漳沱河畔で作ったのではないかと推測する。

宋自濟『李賀年譜』は、元和八年（八一三）春、李賀は病を以て官を辞し昌谷に帰り、冬十月また京に入り、皇甫湜と別れ、九年（八一四）京より帰り、秋、友人の張徹を頼って潞州につき、十一年（八一五）潞州より帰り、死んだ、とする。朱氏は、賀の生年を徳宗の貞元六年庚午（七九〇）とみるから、元和十一年には二十七歳とする。生年を貞元七年辛未（七九一）とみるならば二十六歳である。そうして卒年は翌元和十二年丁酉（八一六）となる。

李賀が潞州に行った時を朱氏が元和九年と推定するのは「客遊」338を潞州での作と見、詩中に「三年去鄉国」の句があるから、卒年を十一年とすれば、それより三年前は九年だ、というのが理由である。卒年が十二年ならば、潞州に行く年は元和十年であって、もいいことになるが、まだそのきめどとなるものをつかみえない。とにかく、元和九年以後、十二年まで、あしかけ三年は潞州にいたであろうことは疑いない。潞州に行ったのが、張徹とのかかわりによったろうことは「酒罷張大徹索贈詩時張初效潞幕」2063などの作で知られるが、さらに昭義軍節度使鄒士義との關係を考えることができる。

「十二月樂辭」1024-1036によって李賀が河南府試に合格したのは元和五年（八一〇）の秋冬のころと思われるが鄒士義はこの年に河南尹となり、六年三月、昭義節度に転じている。士義の父鄒純は、張九齡の知遇をうけて、元載に抗論して官をやめたのち伊川田夫と号して洛陽に隱居し、徳宗朝にしばしば召されたが辞し、太子詹事に除せられ致仕し洛陽に帰るとき公卿大夫がみな詩

美

を賦して送ったという清名高節の人である（壹恋物の「贈高節事」詩はたぶん絶にあてたもの）。
徳宗の貞元九年（七九三）に陝東の令であり、洛陽に近い昌谷に家居の地を定めた賀の父李晉肅
は、郗氏父と交渉があつたかもしれぬ。賀の潞州への往復やそこでの諸詠については別稿で考へ
ることにし、ここでは「北中寒」製作にかかわりがあると思ひれる成徳節使王承宗討伐について
のべる。

元和十年八一五）六月癸卯の未明に宰相武元衡が参朝しようとして家を出て靖安坊東門にさし
かかつたとき、暗闇の中から突然矢を射かけた。従者はみな逃げ、賊が元衡の馬をとらえ、十歩
余り進んで元衡を殺し、その首を持ち去つた。また通化坊で御史中丞の裴度を撃ち、裴度は首に
傷を負い御溝に落ちたが帽子の布が厚いため死なずにすんだ。首都長安は大騒ぎとなり、非常警
戒が行われたが「おれの逮捕を急ぐな、おれが先にお前を殺すぞ」と書いた紙を散らしていつて
いるので、警官たちがテキパキ動かない。けれどもそのうちに、この賊は、成徳節使使王承宗と
淄青節使李師道とが放つた殺客であることがわかつた。王承宗の殺客はつかまつたが、李師道
のはつかまらなかつた。

安祿山・史思明の乱以後、河北三鎮といわれた幽州・魏博・成徳の三節度使はほとんどつねに
唐朝の命に従はず、節度使の職を世襲のようにし、あたかも独立国をなす形勢だつた。憲宗即位
後、魏博の田弘正が恭順を示したが、その東隣の淄青の李師道、南方の淮西の呉元済、成徳の王

承宗らが結んで反復常がない状態であった。武元衡・裴度は朝廷における強硬派であるためねらわれたのである。

十一月丁丑、振武の兵二千を義武（成徳の北）の軍に合わせ王承宗を討伐すべき詔を下した。元和十一年春正月癸未、王承宗の官爵を削り、河東・幽州・義武・横海・魏博・昭義の六道に進討を命じた。

昭義軍節度使鄒士美は、兵馬使王猷に精兵一万をつけて前鋒とした。王猷はぐずぐずして前進しない。士美はよび返して、その罪をせめ、これを斬り、士美みずから軍を鼓舞して、賊を破り、柏郷を下した。『通鑑』によれば、士美が柏郷を下したのは八月己未である。柏郷から饒陽までは百キロメートル前後、戦いは元和十二年にもちこされ、三月、士美は柏郷で敗れ士卒の死するもの千余人。八月、疾によって、工部尚書として長安によびもどされる。

昭義軍の兵が饒陽南郊まで進んだ、という記録を、わたしはまだ見出していない。また李翺がこの討伐に従軍した、という記録も持たない。だがこの二事のために「北中寒」がその資料たりうるであろう、と思う。もともと「北中寒」の製作時を求め作業の中で、このようなことをいっうのは、矛盾だが、節度使の出陣する管内・隣境の戦いに、幕下にあった李翺が一度も従わなかったということはむしろ考えにくく、流動する戦場では、確実に下したと記録される地点から百キロ前後移動することはありえないことではない。

唐朝中央の意識は、この時期、淮西の呉元濟討伐に、より重く傾いており、そこには宰相裴度や文豪韓愈の従軍があり、史家・文人の記念碑的作業も集中するため、李翺の属した昭義軍の行

元和十一年六月、淮西で官軍が大敗し、宰相が戦いをやめることを勧めようとしたとき、天子憲宗は「勝敗は兵家の常。今はまさに用兵の方略を論ずべし。将帥の任にたえざる者はこれを易え、兵食の足らざる者はこれを助けんのみ」といった。まったくその通りである。

李賀が、さきに推測したように、鄒士美の幕下で成徳軍討伐に従い、元和十二年三月にもなおそこにあつたとすれば、大勝も敗戦も身をもつて体験したわけである。

『通鑑』は、元和十一年八月の条に「諸軍の王承宗を討つ者、互に相覬望す。ひとり昭義節度使鄒士美のみ精兵を引きいてその境を圧す」とたたえる。「旧唐書」の本伝は「時に四面の七八鎮、兵は共に十余万、以て鎮（州）（冀（州））を環めども未だ首功あらずして法を犯す多し。士美の兵士は勇敢にして法を畏れ威声甚だ振う」という。またかれの人となり「善く人と交わり、然諾の際に驕如たり。当時名赫翕然」という。これを「李壽墓誌」の語でいえば「禁令肅清、仁惠孚洽」とあるに近いであろうが、しかもなお破れる。

後漢の光武帝は、滹沱河の苦しい退却戦を体験したので、將軍馮異が回溪で大敗し、鴈池の嶺底で敵を大破したとき「始めは剣を回谿に垂れしかど、終に能く翼を鴈池に奮えり。これを東隅に失いこれを桑榆に收めたり」といふべし」とわがらった。

さて、史書の伝えるこれら事件を読んできて、痛感するのは、滅亡者のあわれみである。勝利者たちは、その得たものが予期と違ふにせよ、それにつづく舞台できらびやかな衣裳をつけてならぶ、李神通としてその一人で、現に発掘された墓からみても、当時有数の大貴族であったことは察えない。

竇憲徳や劉黑闥は、まったく民衆の中から立った革命家であり戦闘家だ。竇憲徳のヒューマニズムは、かれを殺した唐朝の人々をも感動させざるを得ず、劉黑闥の不屈の戦法は中国三千年の戦史の中でも特筆すべきものだろう。唐朝は、建徳のヒューマニズムに裏切りをかけ、そのことにより、帰農した黒闥を逐たせ、長い戦いで山東・河北の地を荒廃させたのち、天下の権力を奪取した。しかもその後、同族の間で殺戮を重ねながら、その勝利者が天子となり「聖人」とよばれた。斬首された敗者には墓もない。「畑をたがやめてあられたものを」という劉黑闥のことは、のなんという悲しさだろう。だがまた考えれば、墓がなければ後にあばかれることもないのである。

竇憲徳も劉黑闥も、民衆の中から立った革命家だが、いずれも生前みずから天子と名のり王と称した。帝王という位置がそれほどにも魅力のあるものだろうか。

民衆の幸福を約束して英雄たちが立ち、戦うとき、まっさきに家を焼かれ、親子兄弟が敵りたりになり、塵あくたのように死んでゆくのが、民衆であろう。

英雄たちの約束する幸福がこの地上に実現したことは、歴史に見るかぎり、いまだかつて一度もない。にもかかわらず英雄志願は絶えることなく、英雄は相かわらず塗りかえた幸福を約束す

る。かれらに約束を実現することはできないが権力を握ることは巧みで、権力のあるところにはそれを正当化する理論家がかならず集り、力と理論が手を組めば、力と理論のないものは、あはらしやと思つても、黙つて見ているよりしかたなく、といつても黙つて見ていることも権力をもつた英雄には氣にいらぬから、つまりはかれらの思ふ方向に動かされ、しぼりとられたあげくに死んでゆく。泣いてもわめいてもそんなことば一言半句も記録されぬ。學者によつて記録される歴史の中にあらわれることのない、それゆゑに沈黙としかいいようのない號泣が凍合して、英雄たちの何重にも接合した闘争の歴史の結節点で凍っているのが、思いがけなく戦争の渦中にほうりこまれた詩人李賀の感性を驚き「北中寒」となったのだろうか。

1975. 4. 12

▲雑叢・17V

唐 熙名氏 李壽墓誌

文物・一九七四年第九期（总二二〇号）

大唐故宗正卿右翊衛大將軍河北道行臺左僕射左武衛大將軍玄戈軍將開府儀同三司上柱國司空公
淮安靖王墓誌

王諱壽字神通龐西狄道人 太祖景皇帝之孫鄭孝王之嫡子也憑暉若木漸瀾成池早延一顧之賞幼聞
千里之譽篤學不倦寧有意於屠龍力行無怠終取成於刻鵠久蓄奇材未程寶備絕交當世爾神怡漢及
家撥亂肇自太原九夷之家猶起八百之期方會迺眷西顧將定鎬京蠶爾逆徒擁兵作孽依託城社屯守宮
崇惡直醜正剝喪忠良禍苦發機計不旋踵王託處家巷去來郊郭應變無方出其不意遂乃密運奇策潛應
師遠被寵章即委綏緝拜光祿大夫封趙興郡開國公食邑二千戶仍為招慰大使於是占募駭推連結豪右萬
夫之長鱗率百金之士雲屯會彼神鋒致茲城下四凶服罪三監即教龜玉獲安鐘鼎俾人元勳以建茂賞斯登

壽寧元年十一月拜宗正卿增邑并前五千戶加賜良田甲第金寶器物尋遷左領都督摠知皇城宿衛追敘宗室之勳廻授一子代德之符既至揖讓之禮斯行寵樹厥蕃光陸扶命武德元年拜右翊衛大將軍進爵永康郡王臨軒授冊又改封淮安郡王邑戶如舊于時常山以南猶阻聲教太行左轉尚曰匪民推轂闢外誓寧兼重允質威屬式付賢能乃以王爲持節山東道慰撫大使封拜刑等皆得專之禁令肅清仁惠孚洽扶老攜幼動色相趨武德四年又授河北道行臺尚書左僕射給親兵二千人馬八百匹於洛州鎮守六條所察摠戶其任八坐之重儼則上京理勃海之亂獨取有梁之駟馬委累竄屏閭閻胥悅衆劉黑闥作難洛水徐円朗放命兗州承旨清表累致克捷五年拜左武衛大將軍仍授玄戈軍將髻髮被緘之士望旌徽以齊肅拔距投石之材知鉦鼓之進退於是外治冥府內次直廡續宣周衛之中威行鄙藪之側我 皇踐祚其命惟新履禮元功懋敘九族養德之秩車服以膺溫屋之萌重開書社遠開府儀同三司別食益州五百戶封肥弁之燕無曠於旬朔冬祭之錫豈輟於歲時方當布帛膠庠光饋賙之盛禮就居省闈延几杖之優命既而陰堂致夢陽烏爲災東海之孳難逢越人之罕驗貞觀四年十二月寢疾薨于京城延福里第春秋五十有四痛感 一人哀深百辟資給贈特加常等之罕驗貞觀四年十二月寢疾薨于京城延福里第春秋五十有四痛感 一人哀深百辟資給贈特加常等有詔贈司空謚曰靖王禮也惟王倜儻大志少懷沖天之學諳英姿克隆佐聖之業信倬瀚汐言若綉縉折節卑躬華賢容衆軼廬龐僊係藪匪慙傲格之容見重於朝廷瞻恤之義博洽於親黨降年不永烏呼哀哉嗚以五年歲次辛卯十二月景戌朔十一日景申葬于雍州三原縣之萬壽原懷溥海之爲田儻佳城之見日式銘貞石以

紀芳猷其詞曰

阜陶本系老聃之裔開國承家分源齊世誕茲明德瞻涯雍際文質斌斌威儀遠逮時逢啓聖業預艱難授旗鸞鼓警衆升壇成軍渭泐受命河干地均澤廣功踰烈丹赤芾登朝兼資文武育社錫命備斯蕃輔宣輔宣風任切惟賢是與端揆望隆非親執處上則台階旁齊鼎鍊玉并華哀金毀縹軸大查未嗟長塗遠速悠悠蒼昊云如

不淑水從玄夜言歸營道玲瓏挽繹蔚發容涼風結寒松霜凝宿草山鶴方至靈龜是考

△ 杂丛 · 18 ▽

唐無名氏 李神符墓誌

陸心源輯 · 唐文統拾 · 卷十四

大司空開府儀同三司揚州荊州二大都督并州大摠管上柱國襄邑恭王之碑銘

竊維麗天凝景潘衡紀其躔次括地分區侯王胙其疆域巨唐經綸帝業光啓靈圖茂功□□弘以□□之□

□□□□□□□□之□其有續宣□□□□龍旂兼望重於親賢樹英猷於家國者其在襄邑王乎王諱神符

隴西成紀人也景皇帝之孫鄭孝王之子太宗文皇帝之從父今上之從祖也昔統極流慶肇基□□寶月□神

嗣興寶錄齊聖廣深之德既胙嵩於虞庭可道非常之教亦威蕩於周史景皇帝功高定霸瓊攸歸鄭孝王業盛

經邦舟輦斯在若殷契之佐夏景亳終啓其祥喻姬昌之佐鄭錡京乃隆其祚浮天引派浚委咸池之源拂日疏

柯遙板若華之景王累聖鍾美積德垂裕辰象陶其粹氣山岳感其英靈抱美含仁韓神宮而峻趾騰文擊武跨

仙澗以鳴佳雄姿映徹逸韻韶舉曲疊宣榭禮樂以成其德□宇緇林詩書以弘其道尋其軌躅縉如北唐之駕

竊其隕秘煥若東山之府靈江都不守中京圯壁毀構挺灾噬駭昭慶火焚彝器驚巨燎於炎巖水覆生舟揚洪

沒於泝海戰爭方始亂離云璣金刀與而素靈哭玉鏡墮而黃神吟王剡跡韶光待時感器智周野之際神怡宇

宙之間載此□鱗潛孟諸而未躍理□大翼臨扶搖而將舉我高祖大武皇帝撫歸運握禎圖傾姬鉞搜軒孤正

頃維於地紐締落構於乾樞掩參郊而大誓望域以長駟及四門□穆太尉翊□□之命臨邦作又司空齊□象

之尊爰以茂親用昭縟禮義靈元年封安吉郡公食邑二千戶仍拜太府少卿俄而天地革運品物咸亨則大居

宸履端垂統蒞初受命載隆禦侮之規太始開元式降分封之冊武德元年封襄邑郡王邑三千戶餘如故轉雍

州司馬展其驥足仰叶題輿屈此鴻材府舊持板德刑具舉寬猛兼濟替月成化輦轂肅清于時文軌未同國步

斯阻西羌煽禍猶拒彘城之仗北狄稱兵時引蕭關之寇天子聞聲軫慮推轂仁能將申橫野之功必在光朝之